司馬懿仲達の憂鬱

堕落論

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
司馬懿仲達の憂鬱

【Ｎコード】
Ｎ２１５４Ｙ

【作者名】
堕落論

【あらすじ】
司馬田尚志（しまだ ひさし）は冴えない中年オタ、離婚届を提出した帰りに普通じゃない事故に巻き込まれてしまい死を迎えるが、その普通じゃあない事故の張本人によって自分が書いていた二次小説の元になる世界に転生させられてしまう。
自分が知っているゲームとは微妙に違っている世界……でも自分が知っているキャラ達は多数登場する世界…姿は若者、精神は親爺の主人公の明日はどっちだ

プロローグ　（前書き）

この小説はオリキャラ主人公＆筆者の観念世界での話と言う事で、その辺りが苦手の方はご遠慮して頂いた方が良いかとは思われます。それでも良いよ。という優しい方はお目汚しかとは思われますがお付き合いくださいませ。

御批評、苦言応援等ございましたらどんどん頂けたら幸いです。皆様からのコメントが筆者の成長につながります。

では拙い物ではございますが宜しくです。

プロローグ

「司馬田さぁ～ん、司馬田尚志さ～ん……」

事務的な声が部屋に響く。ここはうどんで有名な某地方都市の市庁舎の市民課である。

司馬田と呼ばれた男は年齢は４０半ばであろうか、くたびれたスーツ姿で、何処か人生に疲れたと言う表情で先程名前を呼ばれた窓口に向かい、係りの者から書類の様な物を受け取る。

受け取った書類を、これも書類発行の際の料金を払う時に一緒に受け取った市庁舎の名前入りの封筒に入れながら、彼は一階ロビーを通り抜け玄関から外に出る。

市庁舎から退出し駐車場に置いてあった車に乗り込みネクタイを緩めると車を発進させた。

「はあ～っ……」

市庁舎前の交差点で信号に捕まった彼は大きな溜息を一つ吐き、カーステレオのＣＤトレイから半分ほど顔を出しているＣＤにチョンと触れた。少しの間をおいてカーステレオからはいつも好んで聴いている８０年代ポップスが流れ出した。

「婚姻届を出した時も思ったんですが、紙切れ一枚で簡単に家族になったり他人になったり出来るもんなんですねえ……」

青信号を確認し、まるで誰かに話しかけるかの様に独り言を呟きな

がら車を発進させる。

「さて……離婚届は受理されましたし後は午後から家裁で子供達との面談の日取りと養育費の相談ですか……どうせあちらは弁護士さんのみの出席でしょうから……気が重いですねえ……」

今日は休日となっている自分の職場に向かいながら、車を走らせている途中に建っている地方裁判所を横目で見て心底ダルそうな口調で、また独り言を呟いた。

車内で今後の事を考えながら胸元から取り出したセブンスターに火を点けようとした時に、突然車のフロントガラス一杯に真っ白な鳥の羽根の様なものが拡がって視界を覆う。

「へっ……？　何なんですか……？」

驚愕で素っ頓狂な声を出した身に次に起こった事は、ドスンと何かが車のボンネットに落ちて来たかのような感覚

「えっ？　ええっ……？　うわあっ！！」

そして何が何だか分からずに、真っ白な視界を振り切ろうとして慌ててハンドルを切った直後、凄まじいまでの衝撃が彼の車を横転させる。その衝撃はシートベルトをしていなかった彼を、いとも簡単に車外に放り出して二度三度と路面にバウンドさせる。

彼は一度目の路面との接触で頭部を強く打ち、二度目三度めの接触では、衝撃で折れた肋骨が、どの臓器かは判別出来ないが刺さったのであろう激痛に、自らの死を否が応でも理解した。

「何なんですか今のは……それより……もう多分駄目でしょうねえ……将太、愛香……ごめんなさい……お父さんは……」

薄れ行く意識の中で子供達の事を思い浮かべる一方で、混濁する意識の中では

「ああ……そう言えば部屋の掃除もしてませんでしたねえ……床にはエロ本が散乱している筈だし……パソコンも二次小説書きっ放しでシャットオフしてませんね……」

どうでも良い様な事を考えつつ彼の意識は途絶えた。

プロローグ　（後書き）

どうも堕落論と申します。

初投稿となりますがいかがでしたでしょうか？

今後とも細々と続けて参りたいと思いますのでどうか宜しくお願い致します。

プロローグ　2　真実

「……せんか？　……さん、……さん」

誰かが自分に向かって話しかけている声に反応する様に意識が徐々に戻って来る。未だ混濁した意識ではあるが、先程自分の身に何が起こったかはハッキリと覚えている。

（取り敢えず声が聞こえると言う事は生きているみたいですね……体の感覚が何か変な感じですが、まああれ程の距離をフッ飛ばされればねえ……兎に角、生きてて良かったと言う所でしょうか）

だんだんと覚醒しつつある意識で彼はそう考えた後、ゆっくりと目を開けようとした時に、いきなりハッキリと声が聞こえた。

「まあ、そう考えたいのはヤマヤマでしょうが、残念ながら貴方は既に死んでいます」

「はいっ？」

唐突に聞こえて来た声に思わずゆっくりと開けようとした目を見開き、寝たままの状態で辺りを見回す。意識の片隅で何処かの病院の一室である事を期待していたが、淡い期待を者の見事に打ち砕く様に辺りは暗闇で覆われていた。

「此処は……何処でしょうか？」

「まあ、貴方達の世界の分かり易い言葉で言うのならば『死後の世界』ってやつですかねえ」

呆然自失となった状態で口から出た独り言に、すぐさま答えが帰って来た事で、もう一度だけ目の動きだけで辺りを見回してみたが、先程から答えを返してくれる者の姿は確認出来ない。

「えっとぉ……何から聞いたら良いのか……取り敢えず私はどうなってるのでしょうか？」

通常時なら錯乱して喚き散らしてもおかしくない状態であると言うのに、今は現状把握を最優先するべきと考え直した結果。彼は場の空気を読んで最適な質問をした筈なのだが

「貴方……変な方ですねえ……大抵の人間は、こういう状態に陥ると著しい恐慌状態を引き起こすものなんですけどねえ……失礼ですけど貴方、生前に天然だとかズレてるとか、他人から言われてませんでしたか？」

返って来た答えがこれである。返答の際の生前と言う単語が妙に生々しく感じられたが、それはこの際置いておいて、彼は微妙に痛む頭で言葉を返す。

「確かに喚き散らしたい衝動はありますが……私としては出来るだけ今現在の状況把握をしたいが為の質問のつもりだったのですが、何かおかしかったでしょうか？」

「ふむ……良く言えば落ち着いている、或いは達観しているとでも言うのでしょうが……未だ天然ボケの疑いを捨て去る事が出来ませんねえ……」

「何か非常に酷い事を言われていると思うのですけれど、兎に角現

状の説明をお願いできませんか？　それを聞いた上で、錯乱して暴れるなり、絶望して泣き喚くなりしようと思いますので……」

「（やはり変な人にちかいかも……）そうですね、客観的な事実を申し上げますと、司馬田尚志さん、貴方は不幸な事故でお亡くなりになりました」

「はあ……不幸な事故でですか……」

「はい、不幸な事故です。我々の主、貴方達が神と呼び崇め奉る御方が下界に降臨された際の、ちょっとした手違いに貴方が巻き込まれた形になってしまったのです……本当に申し訳ありません」

それまで事務的に話していた声の主の口調が事故の謝罪の際には悲痛さが感じられる声に変わっている事が、これは間違いなく真実の事であろうと彼を納得させた。

「そうですか……まあ人である自分には分からない世界の事ではありますが、主が降臨されたと言う事は余程の大事だったのでしょうね……」

「はあ……まあ……その……」

何故だか相手の口調が急に歯切れの悪いものとなってしまった事に、若干の嫌な気持ちを感じつつ先程より詰問口調で問うて見る。

「もう一度御聞きしますが余程の大事で貴方の主は降臨されたんですよね」

「……」

「何で無言になるんですか？」

「いやあ……あのお……大変言い難い事なのですが……今回我が主が此の地に降臨されたのは……そのお……貴方が言う様な大事では無く……え～とですねえ……天界るるぶに掲載されている程の『さぬきうどんの店』に行く為だったんですよ……ハハハ……」

「はあぁぁぁぁぁぁっ？」

事故の真実と声の主の渇いた笑い声を聞いた彼は、あらん限りの声を張り上げた後、あまりのショックの為にまたもや意識を失っていくのであった。

プロローグ　2　真実（後書き）

どうも堕落論です。

『司馬懿仲達の憂鬱』プロローグ2をお届けいたしましたが如何だったでしょうか？出来るだけ早くプロローグを終了させて本編に入りたいと思いますので今後ともどうか宜しくお願いします。

プロローグ　3　提示

「……っ、ううっ……うううんっ……」

（何か悪い夢を見た様な気がしますね……うん、悪い夢です。神様ってのが居るって事は良しとしましょう……ですがその神様がうどん食べる為に降臨するなんて……何処の『聖☆おに〇さん』設定ですか……そう、これは夢です。此処の所離婚調停等で疲れていた私が見た夢なんです。ええそうに決まっています）

混濁する意識の中で、彼はそう考えて今度こそ本当の世界へと希望を抱きながら目を開けようとした時、

「いや、現実逃避をされるのは結構なんですが……何度気絶されても司馬田さんが死んでいると言う状況は変わらないですよ」

宛ら全ての希望を打ち砕くかの様な声が聞こえて来る。何とは無く理解はしていたが、改めて突き付けられた事実に対して非常な理不尽を感じて声を荒げてしまう。

「何を他人事のように仰っているんですか？　そもそも貴方の主が、うどんを食べたいが為に下界に来なければ、今此処に私はいない筈じゃあないですか！！」

「まあその事に尽いては我々天界も甚だ遺憾には考えているのですが、我々は決して今回の不幸な事故を他人事などと無責任な事はちっとも思っていませんですよ。それ故、事態収拾と事後協議の為に態々大天使の私自らが天界から派遣されて来たのですから、人の身でありながら光栄だと思って下さい」

「え～と……甚だ遺憾であると言う政治家の様な答弁とか、貴方が大天使であるとか、事故の張本人である貴方方が何故上から目線なのか等、ツッコミ所は多々有るのですが……」

「それがどうかいたしましたか？」

言外に何か文句があるのかとでもいう雰囲気を漂わせた相手の言葉に彼は、もうどうでもよくなってきて投げ遣り気味に言葉を返す。

「いえ、これ以上不毛な会話を続ける事は精神衛生上良くないって事だけは理解が出来ました……で、事態収拾と事後協議と言う事ですが、結局私はこれからどうすれば良いのでしょうか？」

「ほう、御理解が頂けたようで幸いです……もう少し錯乱状態で抵抗を示すかと思っていたのですが……司馬田さんって、やはり少し人としてズレていませんか？」

「貴方は話を纏めに来たのか、私の事をからかいに来たのかをハッキリとさせた方が相互理解の為に宜しいのではないかと思いますが……」

「いやいや、これは失礼致しました。でも突発的な事故でお亡くなりになったのに、此処まで冷静な方は本当に珍しいんですよ……まあそれはさて置き本題に入りましょうか」

「やっとですか……あんまり前フリ長いとＳＳ読者にソッポ向かれてしまいますよ」

「ハイ、其処の死人、メタ発言禁止！！」

「何で天界の大天使とやらがメタ発言なんて言葉知ってるんですかっ！？」

「まあ、近頃の天界は何でもアリですからね……と、言う訳で本題に入ります。突然ですが貴方には転生して貰います」

「はいいっ？」

「転生ですよ。テ・ン・セ・イ。分かりますか？　転生！！　貴方が望んだ世界に転生して頂いて、我々天界が付与したチート能力全開で「そりゃあもう大騒ぎさっ、イェ～ィ！」ってな具合で新しい人生を楽しんで貰おうと言う事で……オケ？」

「いやいや……オケ？　って……そんな軽いノリで言われても、元の世界に生き返るって事は出来ないんですか？　私つい最近離婚が成立しましたんで将太に愛香、二人の子供達の養育費も払っていかなければならないんですよ……」

「ああ……言い難いのですが生き返るのは無理ですねえ……だって貴方の遺体はもう荼毘に付されましたし、貴方が死んだと言う事をかなりの人が認識しているんですよ。それらの認識を全部書き換えて貴方の人生を再構成するなどと言うプチ創生なんて、ぶっちゃけ面倒くさいだけですし……」

「面倒くさいって……そもそも貴方達の手違いでしょうが」

「それについては重々申し訳ないとは思っていますが、実質貴方一人を生き返らせると貴方が死んでから以降に出生した新たな命を全て無かった事にしなきゃいけないんですよ……そんな悪魔の様な所

業を貴方は望むんですか？」

「ぐっ……」

「ですからここは一つ貴方に我慢して頂いて快く転生して頂けないかなあと、我々は思う次第でありまして……勿論転生した世界での身の安全及び快適なセカンドライフは天界が保証しますよ」

「二人の子供達の養育費は……私がそれを払えないとなると元妻と子供二人の生活の心配が……」

「それは無問題です！！　貴方が御子さん二人を受取人にしている生命保険ですが此方の方で手を加えておきましたので、毎月３０万円程は奥さんの口座に入る様になっていますし、貴方の両親にも同額が振り込まれますよ」

「貴方方はうちの家族を全員ニートにでもするおつもりですか？」

「まあそこは天界からの誠意と言う事で御納得を頂いて、如何でしょうか後顧の憂いも無くなった事ですし、ここは一つ快く転生して頂けませんかねえ」

そう言った声のトーンは大天使と言うよりは、自分が加入した生命保険のセールスレディに近いなあと、彼は現実逃避が半ば入った状態でぼんやりと考えていた。

プロローグ　3　提示（後書き）

どうも堕落論です。

『プロローグ　3　提示』を書かせて頂きました。

次回でプロローグ終了いたします。

今後とも頑張りますので宜しくお願い致します。

プロローグ　4　旅立ち

「はあっ……何と無く釈然とはしませんが、ここは黙って貴方の言う通りに転生した方が話が早く転がりそうですねえ……そろそろ本編に行かないと評価ポイントにも影響が出て来るでしょうし」

渋々と言った表情で尚志は大天使が言った転生話に了承の意を示した。

「誰に向かって話してるか……何て事は今更なので突っ込みませんよ。それよりもその答えは転生受諾と捉えても宜しいのですね」

「ええ、どのみち二度と子供達に逢う事が出来ないのであれば、この世界に未練は無いですからね……ところで私はどう言った世界に転生させられるのですか？　先程の話ではチート能力の付加と身の安全は保障されると言われてましたが……」

「はい、我々天界が貴方の望む様な「俺様、Ｔｕｅｅｅｅｅｅ！」的な力を付与しますので、貴方自身が死ぬ羽目になる様な事は余程の事が無い限り発生しませんよ。それでどの様なチートを御望みでしょうか？」

「どの様な……と、言われましても、行く先が何処か分からなければ、能力の御願の仕様が無いじゃあないですか」

「ああ、それもそうですねえ……ではお教えしましょう。今回貴方が転生して頂く世界は……ズバリ『真・恋姫†無双』の世界です。どうです嬉しいでしょうヒューヒュー」

大天使と名乗る声は、そう言うと頭の悪いアイドル司会者の様に囃し立てる。

「あのお……」

「ん？　如何しました？　何か転生先に御不満でもございますか？」

「いや……不満と言うよりは、何故に『真・恋姫†無双』の世界……なんでしょうか？」

「え―っ、だって貴方の事を知る為に部屋を見に行かした織天使からの報告では、貴方の机上には恋姫のエロゲーに三国志関連の資料が散乱し、床には恋姫関連の同人誌、それに何よりもＰＣには貴方ぐらいの年齢の方が書くには、相当痛くてキモイ二次小説が書きかけのままだそうじゃないですか」

「い……い、痛くてキモイ小説……ですか」

「いやまあ、その辺りは個人の見解の相違って奴でコメントは差し控えさせて頂きますが……ここまでされるのであれば相当お好きなんでしょう、その世界が」

「あのですね……私は恋姫が好きと言うよりも、ただ単に恋姫が題目として案外書き易かったから書いてたんですが……」

「何ですって……では山と積まれた三国志関連の資料と床に散らばる１８禁恋姫同人誌は？」

「まあ、いくら二次小説とは言え嘘八百は書きたくなかったので、それなりに資料は集めましたし……後、１８禁本は……単なる

自分の性的趣向です」

最後の方で尚志の声が小さくなってしまったのは御愛嬌と言ったところか。

「おやおや、これは困りましたねえ……我々は貴方の部屋の状況から鑑みて転生先は恋姫の世界しかないと判断したので、他の転生先など用意しなかったんですがねえ……」

「別に恋姫の世界自体が嫌いな訳では無いですから、其処に転生させて頂ける事については吝かでは無いのですが……」

「いやに奥歯にモノの挟まった様な言い方をなさいますねえ」

「いや、先程のチート機能の件なんですがね……転生先が恋姫の世界と言うのならば、貴方方が提案された「俺様、強ぇぇぇぇ！！」的な要素は私的には不要かなと思ったものでして」

「その訳は……伺っても宜しいですか」

「ええ、大した訳でもありませんからね……まあ何と言うか、恋姫のどの辺りに転生させていただけるか全く分かりませんけれども乱世である事は間違いないのでしょう？」

「まあ、そうなりますねえ」

「いくら転生者と言えども転生世界の摂理を無視した様な武力は、やがて自分や周りの世界を壊して行くように思うんですよ。それならば超人的な武力などよりは知力や魅力の方を私は望みます、まあ何よりも私には戦場での縦横無尽の働きなぞ出来そうに無いですか

らね」

「ふむ……まあ、それが貴方の御考えであるならば重視させて頂きますが……ならば貴方に対しての付加は統率力、魅力、知力、政治力……後は『主の祝福』と……」

「何ですか？　その『主の祝福』ってのは……」

「ああ、これは先程からの話に出ている貴方の転生先での命の保証ですよ。これがあれば何があっても貴方は死ぬ事はありませんし、勿論、大怪我ひとつ負わずに新たな人生を送れますよ」

「ん～……」

「どうしました？　まさか貴方『主の祝福』までも要らないと言うのでは無いでしょうね！！　貴方がこれから転生する先は乱世なんですよっ！！　貴方が考えているよりもずっと『死』と言うものが現実的な世界なんですよ」

「ん～……確かにそうなんでしょうがねえ……チート機能付けて貰って言うのもなんですが、転生したら少しは前向きに生きようと思うんですよ……それこそ日々を一生懸命にね……」

「……」

尚志の揺るがない決意に大天使は返すべき言葉を失ってしまい、暫し重苦しい沈黙が辺りを支配する。どのぐらいの時間が経ったであろうか、

「……御考えは変わらない様ですね……」

「ええ、折角の御好意ですが申し訳ありませんねえ」

「分かりました、出来るだけ貴方の御要望に沿える様に致しましょう。全く……やはり貴方は変な方ですねえ」

大天使の声は、そのものが天からの福音の様に神々しく辺りの空間に響き渡る。

「さてと粗方自分の要望は聞いて貰えるようですから、安心して新しい世界に旅立たせてもらいましょうか」

「まだ細かい所の説明やお伝えしなければならない事が多々有るのですが……」

「もう充分ですよ。それに……」

「それに……？」

「自分の新しい人生ですから、手探りで成長を感じていきたいじゃあないですか。だからこれで充分なんです、さあ、早くあちらの世界へと送って下さい」

「やっぱり変ですよ、貴方……でも短い時間でしたが貴方とお話ししていて感じられた事は、今迄の遣り取りは実に貴方らしい……と、言う事でしょうか、それでは司馬田さん、今一度目を閉じて下さい」

「はい……」

「ゆっくりと気を落ち着けて……はい」

不思議な事に尚志が目を閉じた途端に急速に尚志の意識は混濁して行き、まるで風呂にでも浸かっている様な感触に包まれる。大天使の声が徐々に聞こえなくなり、寄せては返す様な波の音に変わり自らに意識が完全に途絶える時

「将……太……愛……香……幸せ……に……」

それが現世での尚志の最後の言葉だった。

プロローグ　4　旅立ち（後書き）

どうも堕落論です。

『司馬懿仲達の憂鬱』プロローグの最終回を書かせて頂きました。

書きながら思ったのですが、オリ主と大天使の口調がモノの見事に被っちゃってますねえ……（苦笑）

さて次回からやっと本編です。精一杯頑張って書きますのでどうか宜しくお願いします。

司馬懿　ＶＳ　曹孟徳　前半戦（前書き）

どうも～堕落論です。
今回は試験的にオリ主目線って奴で書いてみました。
読み難い所も多々あるでしょうが一時でも楽しんで頂けたら幸いです。

司馬懿　ＶＳ　曹孟徳　前半戦

え～、『司馬懿仲達の憂鬱』を読んで頂いる皆様、御久し振りです。故あって恋姫の世界に転成致しました、司馬田尚志改めまして司馬懿仲達です。

何故いきなり私がメタな発言なのかと言いますとですねえ、実は、司馬家の長男として、この『恋姫』の世界に生を受けてから既に１８年近くも経っちゃってるんですよねえ……

ぶっちゃけ幼少時の頃の事など本筋を進めるにあたって邪魔以外何者でもないですし、特に４０ン才の思考を保ったまま我が母『司馬防』（恐らく私を生んだのは２０歳になるかならないかの時期でしょうか……）の豊かな胸に顔を埋めて一心不乱に母乳を飲んでる姿なぞ、二度と思い出したくない程のトラウマなんですよねえ……しかし、母乳ってあんまり美味しいものでは無いんですねえ、あれをプレイにしている人達って一体どういう人種なのでしょうか？

まあ、それはさておき……転生した先が『司馬家』だと理解した時には「名字繋がりなのかっ！」とか「司馬懿だとしても登場時期が微妙……」とか思ったりもして此処は本当に『恋姫』の世界なのだろうかと色々疑いましたが、自分以外の『司馬の八達』が全て女性だと判別した時（末妹の司馬敏が生まれた時ですが……）に、やはり此処は『恋姫』の世界なのだと妙に納得したものでしたねえ。

取り敢えず此処に転生する前の御約束事であった能力に関してですが、自分の要望通りの知力や魅力を与えてくれたようでして、司馬家の一男七女の中では博覧強記・才気煥発とのお褒めの言葉を頂くほどでありまして、魅力の方もそこそこの様です。

が、しかし武の方に至っては末妹の司馬敏（現在８歳、本当に可愛いんですよこれが……）からも「兄上、もっと武芸に励まなければ御自分の身も護る事が出来ませぬ！！」と、強烈な打ち込みを喰らうほどの体たらくなんですよ……トホホ

ああ、後、幼少時の思い出と言えば、あまりにも家族や使用人達に至るまでに厳格過ぎる両親に対して司馬朗姉上と二人で家庭内闘争を試み、一年余りを掛けて、明るい家庭内環境と妹達の自由な人生を勝ち取った事ぐらいですかね……

えっ？　当時の教育的な考えは儒教であって親に反抗するのは駄目だろうって？　まあ確かに両親に対する反抗など儒教での孝悌に於いてはとんでもない事なのでしょうが、それ以上に家族（司馬家で働いてくれている使用人達も広義では家族です）の間に厳格などと言う己の力の誇示の様な壁を創る事に対して私は我慢が出来ませんでしたからね。

ただ勘違いして欲しく無いのは、私個人として儒教をこの時代の儒者の様に妄信していないと言うだけであって、基本的に儒教は人の行動の原理ではあると思っているのですよ。最も儒学者なんてものには絶対になりたくは無いですがね……

まあそんなこんなで、この『恋姫』の世界に生を受けて１８年近くまったりと生きて来た訳ですが、先年の春に母上が洛陽での治書御史に任じられ一族郎党を引き連れて引っ越しをしてきた際に、姉上と私も半強制的に出仕する事になり、姉上は母上の手伝い、私は何故か母上の御友人で三公の司徒であられる袁隗様に気に入られ、袁隗様の秘書の様な仕事に付いております。

秘書と言っても公的な職務における秘書は朝廷から任じられている方がいらっしゃいますので、私の仕事は袁隗様のプライベートに関する事が主であり、どちらかと言えば袁隗様の政策立案であったり、洛陽の都市計画の発案をしたりする事のほうが多いんですが……勿論正当な国からの賃金など出る筈も無く、私の給料は袁隗様の私費から出されているので元居た世界で言えば私設秘書兼ブレーンの様な扱いですかね。

「……と、言う訳で、以上、転生してから現在に至るまでの事情説明を終了させて頂きます」

「仲達……貴方、先程から私の問い掛けを無視して、誰に向かってブツブツと独り言を喋っているのかしら？」

ここは宮中にある資料庫に隣接する閲覧室。私の様な下級官吏ですらない者が立ち入れる様な場所ではないのですが、上司である袁隗様の御好意で後漢建国以来の政治的資料を閲覧させて頂いています。先程から私に喋りかけて来ているのは誰あろう曹孟徳、真名は華琳。『恋姫』の世界では一番の有名人が私の眼前で腕を組んで座られています。

何故に覇王曹孟徳の様な方が未だ一般庶民と大差ない私に話しかけているかといえば、猛徳さんが孝廉に推挙された折りに洛陽北部都尉に起用したというのが我が母であり、その縁から何かと親しくして貰っている訳なんですよ。

しかし妄想世界の住人であるとはいえ、流石に曹孟徳です。ただ、座して話をしているだけなのに、この覇気に満ちた威圧感は反則だと思います。幼少の頃の我が母の質実剛健な威圧感もかなりなものでしたが、眼前の少女が発するそれも、勝るとも劣らぬものが感じられます。……唯一つ我が母と違う所は、まあ、母性の象徴である体の一部分が我が母と比べると慎ましやかで残念だと言う所ですか……

「仲達……貴方、私を無視した上に失礼な事を考えているようだけれど……一回死んでみる？」

いやいや、孟徳さん、人の心の内まで読めるなんて貴女こそ一体何処までチートなんですか。それと危険ですから絶をこんな場所で突き付けないで下さい。確か宮中には武器は持ち込めない筈なんじゃなかったでしょうか？　……ハァ～ッ、しょうがないですねえ、あまり調べ物の邪魔をされたくは無いんですがねえ。

「私は別に孟徳さんを無視している訳じゃあありませんよ、必要最小限の返事はしているじゃあないですか。それに孟徳さんの所への仕官の話ならば、もう何度も断っている筈だと思いますが……」

「ええ、確かにもう何度目かも分からない程、悉く仲達には仕官の話を断られ続けているわね」

「でしょう……いくら治書御史の息子だからと言っても、私の様な小物に何故そこまで拘るんでしょうかねえ？」

「仲達……貴方、自分の事を小物だなんて本気で思っているのかしら？」

「ええ、思っていますよ。私には袁家の様に誇れる様な家柄も官位もありませんし、孟徳さんの側に侍る元譲さんや妙才さんの様な際立った武など持ち合わせていませんし、多少の得意分野である知の方も実際に何かに使用したと言う訳でもないのでねえ……」

「まあ良いわ、ならば仲達、貴方に一つ確かめたい事があるのだけれど、貴方、一応は司徒の袁隗様の書生と言う事になっているのよね。でも実際の所はそれだけに留まらず政策立案や、この洛陽の区割にまで進言をしたって言うのは本当かしら？」

「ああ、その事でしたら確かに先年の初夏の頃に袁隗様から直々に、気付いた事があればと言う事でしたので差し出がましい真似とは思いましたが、私の考えを述べさせては頂きました。しかし進言などと言う様な公式なモノでは無かったですし、あれはただ単に私の能力試験の様なものだと記憶しているのですがねえ」

確かに袁隗様の御側に控える様になって一月ほどたった時に、袁隗様から洛陽の都を見て感ずる所を申せとの御達しで意見書の様な物を提出はしましたが、あれから四季を巡っても洛陽の都は殆ど何も変わっていませんので意味は無かったと思っていたのですが……それよりも孟徳さんは何故そんな事迄御存知なんでしょうか？

「その時に提出したのは、この竹簡の事なのかしら」

そう言うと孟徳さんは、その残念な胸……ゲフンゲフン……いやいや懐から竹簡を取り出して私の方へと広げました。

「ああ、これですね。しかし袁隗様がお持ちの筈のものを、孟徳さんが何故持っているのでしょうか？　まあ最も何一つ政策や意見が取り上げられていない点を思えば、袁隗様の眼鏡に適わなかったと

言う事でしょうが……」

まあどうせそのぐらいの扱いでしょうと元々思っていましたから、別段気にも留めていなかった竹簡を手に取って見ると所々に朱筆で添削されている事に気付きました。

「仲達、私は人材を見極める目は、他の誰よりも有るつもりよ。その私が見ても貴方の政策は、今迄見て来た他の政策案のどれよりも具体的で理に適っていたわ。袁隗様も何度も貴方の意見を上奏しようとしていたのだけれど、その度に頭の堅い内朝の宦官達に握り潰されていたのよ」

「はあ、まあ中常侍のお歴々には御自身達の既得権の問題が絡んできますから、私の意見は、例え袁隗様が上奏されたとしても、まず取り上げられる事はないでしょうねえ」

何時の世にも改革と言うものには、それ以前の旧弊にしがみ付いて利益を得ている者達の反対がある事は理解していますので別段憤る事では無いですね……言外にその意を含んで孟徳さんに返答したのですがその答え方が彼女の気に障ったらしくて、彼女は声を荒げて

「貴方はあれ程の件策案を握り潰されて悔しく無いのっ！　いえそんな事よりも、あの様な愚かな臣共を畏れ多くも霊帝陛下の御側近くに侍らせておく事に危機感を持たないのかしら」

「孟徳さん、ここは宮中ですよ。誰かが何処かで耳を欹てているかもしれない場所で、その様な物騒な事を言い出すのは感心しませんねえ」

「あら、私は誰に何を聞かれても一向に構う事はないわよ」

「いやいや、私が……と、言うよりは袁隗様の御側に控えている私の立場が困るんですよ。こんなことで帝を蔑にする様な話の一端に加担していたと言う事になれば、私に目を掛けてくれている袁隗様の顔を潰す事になってしまいますから」

「私は、その袁隗様から貴方の事を頼まれているのだけれど」

「はいぃっ……？」

孟徳さんから放たれた思いもよらない一言は私の思考を急停止させるだけでは無く間抜けな声をも口から出させました。

「袁隗様は、貴方は自分の手元に置いておくには余りにも宝の持ち腐れであって決して貴方の為、延いてはこの国の為にはならないと、かと言って他の凡庸な者に貴方を預けても結果は同じ事。ならばいっそのこと私の下で貴方の才を自由に使わせてやって欲しいと仰られていたわよ」

「袁隗様が……私の才を自由にと……」

「そうよ、司馬懿仲達。貴方の様な才ある者は、私の下でその類稀なる才を充分に発揮すべきだわ。幸いにもこの末には私は陳留刺史として任地に赴く事になるわ、貴方も知っての通り私の配下には春蘭や秋蘭の様にごく一部の者しか大任を果せる者がいない。内政を司る優れた文官は喉から手が出るほど欲しいのよ」

孟徳さんの覇気に溢れた力強い視線が、私の事を射抜くように見据えます。正直言って、あの曹孟徳に必要とされている事実が私を逡巡させたのですが……

「孟徳さん自らの折角の御誘いですが……」

「やはり、貴方はこの洛陽に残ると言うのかしら？」

「はい、本当に申し訳ないのですが……」

「理由を聞かせて貰えるかしら、仲達」

「理由ですか？　そうですねえ……まず貴女の仰る人材不足の件ですが、これは貴女が陳留刺史になれば、その問題は解決すると思います。何故なら今後数年の内にこの国は未曽有の大危機に陥るでしょう。そうなれば在野にいる私よりも優れた人物は先を争って貴女の元に馳せ参じる事になるでしょう」

「その根拠は？」

「まずはここ数年来の飢饉による食糧不足の所為で農民達はもとより一般庶民に至るまで現体制に対する不満で満ち満ちています。特定は出来ませんが今後各地で武装決起が頻発する事は火を見るより明らかです。一方朝廷側でも禁軍として派兵は行うでしょうが、それでも禁軍が勝利を掴めるのは最初の内だけでしょうね」

「それは何故かしら？」

「単純に言って、数の暴力ですよ。現行の体制に改革が見受けられない限り、庶民の不満は天を衝くほどになって生まれた土地を棄てでも禁軍に抵抗を続けますよ。ならば数が膨れ上がって行くそれらの者に対して動員に限りがある禁軍、さてどちらが有利であると孟徳さんは御考えですか？」

「朝廷だとて無能の集まりでは無いわよ。各地の諸公に対して禁勅を出して兵を動員するし、義勇軍だって各州や郡で結成されるわよ」

「そうですね……その事こそが自分達の首を絞めている事にも気付かずに禁勅を乱発するでしょうね。禁勅を乱発した結果、各地の力を持った諸公達に結果的には大きな力……具体的に言えば軍事力と発言力を持たせると同時に朝廷の力の低下を諸公達に吹聴する事になるんですが、考えてみればみるほど馬鹿らしい話ですね。そもそも国家と言うものを自分達の独占物と勘違いしだす輩が帝の側に多いからこの様な事態に陥ろうとするんですよ。あくまでも国家と言うものは其処に暮らす国民たちの物であって帝の所有物でも無いですし、ましてやごく一握りの特権階級の方達の物では絶対に無いのですから」

私の答えを孟徳さんは興味深そうに聞き入った後に含みのある笑顔で私に向かって言いました。

「先程、私が貴方に咎められた言葉より危険な思想を熱弁しているわよ、仲達。でも中々貴重な意見を聞く事が出来たわ……ところで貴方が言っていた有能な人物が私の下に集まると言った訳をまだ説明して貰っていないのだけれど」

「そんな事、誰に問うても同じ答えが返って来ると思いますがねえ……今後この大陸に数多の諸侯が玉石混淆して台頭して来ると思われますが、五年、いや十年後を考えれば大部分は淘汰され、生きて名を残す諸侯は五指に余るかと……在野の賢人や一騎当千の武人達は息を潜め事の推移を見守っているでしょう。その者達が最終的に誰を選ぶかなど考えるまでもありますまいに……」

そう言った私は孟徳さんの顔をじっと見つめました……いやあ本当に整った綺麗な顔立ちですねえ。ついつい仕官の話を承諾してしまいそうなぐらい魅力的なお嬢さんですよ、貴女は……でも未だ北郷一刀君が何処に現れるかがハッキリしない内に、私は貴女の所に仕官は出来ないんですよ。それに洛陽にはまだまだ私がやっておかねばならない大きな仕事が残っていますし、未だ私の待ち人が天水から上洛をしていませんのでね……

司馬懿　ＶＳ　曹孟徳　前半戦（後書き）

う～ん、オリ主目線って難しい……説明文なのか心の内の言葉なのかの区別がつけ難い……まだまだ勉強しないとなあ……

と、言う訳で次回は後半戦です。もう少しだけでも上手く書ける様になれれば良いなあ……堕落論でした。

司馬懿　ＶＳ　曹孟徳　　後半戦（前書き）

どうも堕落論です。

リアルが多少忙しくて更新が遅れてしまいましたが『司馬懿仲達の憂鬱』を更新させて頂きました。

少しでも面白いと思って頂ければ幸いです。

司馬懿　VS　曹孟徳　後半戦

「どうしたの……？　私の顔に何か付いているかしら……？」

おっと……、孟徳さんの顔を見つめたままだった様ですね。おや？　何故孟徳さんの顔が赤いのでしょうか？

「別に、何でも無いですよ」

「そうかしら？　それにしては、いつも眠たそうな貴方の眼が、今迄見た事もないくらい真剣だったわよ」

「眠たそうな目ってのも、随分な言い草ですねえ。出来たら思慮深い眼とか、愁いを帯びた眼差しとか言って貰いたいものなんですが……」

「はいはい、冗談はいいから、貴方は私の問いに真面目に答えなさいな」

孟徳さんは、私の言い分を華麗にスルーした後に、呆れた様に顔を背け左手をヒラヒラさせて言いました……ムウ……私としてはかなり真面目に言った筈なのですがねえ。

「で、私の問いに……って、まだ私に質問が御有りなんですか？」

「当たり前でしょう。先程貴方が答えた内容は、今後起こるであろう事が切欠で、私の下に人材が集まって来るなどと言う眉唾ものの話じゃないの」

「眉唾ものとは失礼な……私はですねえ、現状に鑑みて、此処洛陽に集まってくる情報を分析し実地見分が必要ならば、北は幽州から南は交州の地まで馬を飛ばしてまでも生きた情報を集めている訳なんですよ。そして、生きた情報を私自らが吟味に吟味を重ねたその上で導きだした答えが、先程、孟徳さんに御話しさせて頂いた話なんですよ」

「（そんなに息巻く様な事かしら……）分かったわよ、分かったから仲達、そんなに身を乗り出して来ないで頂戴。顔が近い、顔がっ！」

「ああ、私とした事が、これは失礼しました。しかし先程御話しした事は決して眉唾ものの話ではございませんよ……孟徳さん……今から話す事については他言無用に願いたいのですが」

私はそう言うと辺りを一度確認したうえで孟徳さんに向き直り、声を出来るだけ潜めて彼女に話しかけます。

「貴女も危惧されている様に、現在霊帝の側に侍る中常侍達の専横な振舞いにより宮中は、まず内朝組と外朝組の政治闘争や禁軍軍部と文官との主導権の奪い合い、そして霊帝の後継者問題などの非常に根の深い、私に言わせれば馬鹿馬鹿しい事この上ない権力闘争が渦巻いております」

「ええ、確かにそうね」

「はい、宮中の大半の馬鹿者共の愚かな権力闘争の所為で洛陽ですら民達の心の安寧は図れずに、治安は悪化し、とてもではありませんが此処が帝のおわしあそばす地とは思えぬほどとなっております。都がこの様な状態では地方の様子などは言うまでもありますまい」

取り敢えずは私の話を聞いてくれてはいる孟徳さんですが、その顔には「今更何を言い出すのか……？」と言いいたげな表情がありありと浮かんでいますが、私はそれを無視して話を続けます。

「恐らく、早くて1～2年……遅くとも3年の間には其々の地方で燻り続けている火種が大きな炎となり、その炎を上手く操れる様な人物を頭目に据えて、この国全土を炎で覆いつくす事でしょう。残念ながら今更これを朝廷の力で防ぐ事は敵いません。しかし朝廷単体の力では各地で頻発する騒乱の対処は出来ずとも、州を治める有力諸侯達は恐らく自分の領地内での騒乱は鎮圧する事が出来るでしょう」

「仲達……一体貴方は何が言いたいのかしら？　私は回りくどい言い方は嫌いなのよ」

「まあ簡単に言えば恐らくはこの騒乱によって霊帝の威光、いや、漢の国の威光は地に堕ちるでしょう……そして漢と言う国、延いては国を統治するべき帝の斜陽を嘲笑うが如くに各地の諸侯達が日の出の勢いの如く台頭して来るでしょう……その後は坂道を転がり落ちる様に血で血を洗う乱世に向かって一直線って所でしょうか」

「仲達！　貴方自分が何を言ってるのか分かっているの？」

ほう、やはり後の覇王曹孟徳とはいえ、現段階では私の言は不敬に思われるのですねえ。先程までの表情が一変して、私の事を得体の知れない者を見る様な眼で見られていますし、その視線にも私を咎める色が濃いですねえ。

「ええ、今自分が孟徳さんに申し上げた事の重大さや不穏な言葉の

数々などの全て理解したうえで私は、曹孟徳と御話をしているのですよ」

「仲達……貴方……」

「現状ではこの数年の間に事実上漢と言う国は有名無実の国となります。その後に恐らくは新しき国の覇権を懸けての大きな戦が始まる事を避ける事は出来ません。私はその覇権を懸けて戦う諸侯の中では、孟徳さん、貴女が最も『覇王』の位置に近い方だと思っているのですがね……」

「私が……覇王……」

「そうですよ、まあ、貴女以外では汝南袁氏の袁紹様に袁術様、今は袁術様の配下におられますが、長紗の太守であった今は亡き孫堅様の後を御継ぎになられた孫策様、荊州の劉表殿、涼州の馬騰様、それに西涼に駐屯されている河東太守の董卓様ぐらいまでが時代の英雄、英傑たる資格をお持ちの方々だと私は考えますが……まあもっとも今、私が名を挙げた方々全員にその気があるかないかは別問題ですがね」

私は会話を一旦止めてから、息を整えて再度話しだします。

「要するに現時点において、やれ太守だとか将軍だなどと言っている有象無象の無能な輩は、今から来る激動の時代に殆どの者が対応出来ないか、対応出来たとしてもあまりの無力さに力ある者に膝を屈するしか道が残されていないのですよ……如何ですか？　これでもまだ私の言う事が貴女にとって眉唾ものの話ですか？」

孟徳さんは私が話し終えた後、暫くの間腕を組んで考え事をしてお

られましたが、何事かを決意したかのような顔で私に問われました

「仲達、貴方は、この曹孟徳が畏れ多くも帝を差し置いていずれこの国に覇を唱える者だと言うのかしら？」

「さて……？　私はこの国の誰よりも孟徳さんに『覇王』の資質や資格があると言っただけで、今後、孟徳さんが貴女自身の覇道を行くのか、或いは帝を助けて今一度漢と言う国を盛り上げるのかなどと言う遠い未来の事などは巷で噂になっている菅輅とか言う占い師でもなければ分かりませんよ」

私がそう言い終わり読みかけの資料を閉じて席を立とうとすると

「お待ちなさいな、仲達」

「えええ……まだ何か質問がおありなんですかぁっ……」

「なんで貴方は私の問い掛けにいちいち面倒そうな顔をするのかしら？　春蘭や秋蘭なら私が声をかければ、それこそ大輪の花が開いた様な明るさで応えるのに……」

「あの御二方と私を比べるのは如何なものかと思いますけど……で、御質問とは？　私この後袁隗様の元に伺わなければならないので出来ましたらお早目に願いたいのですが……」

「そう手間は取らせないわよ。先程の話で貴方が現在の状況をどう捉えているかは良く分かったわ、でも、それだけでは貴方が私への仕官を断り続けている理由にはならないわよ。聞けば貴方、麗羽の所の仕官も断り続けているそうじゃない。何故そこまで頑なに仕官を拒否するのかしら？　それとも何か他に貴方自身が遣るべき事で

もあるのかしら？」

ああ、そう言えば本初さんの所の顔良さんから何度も御誘いを受けましたね、あの顔良さんの良妻賢母で苦労人って所は、私のタイプなんですがねえ、あの方とだったら幸せな家庭が築けそ……ゲフンゲフン……いやいや、しかし残念ながら、本初さんの所に仕官ってのはちょっとねえ……

「まだ、その話を引っ張りますか……」

「当たり前でしょう、貴方のその智勇を目の前にして、そう簡単に諦める程、この曹孟徳、愚者では無いわ。貴方が仕官をしない理由をハッキリと聞き糺すまで私は貴方の事を諦めないわよ」

そう言い放って此方を見つめる孟徳さんの目は間違いなく捕食者の目です。いい加減な言い逃れは許さないと、言う意志がビンビンと此方に伝わって来ますねえ。う～ん、面倒臭いですねえ……でも中途半端な事を言えば言ったで、孟徳さんは諦めないでしょうしねえ……取り敢えずこの場は私の考えの中でも一番危険そうな考えでも話してやり過ごしましょうか。

「私の遣りたい事ですか……？　そうですねえ確かに色々な仕官を断り続けている理由は私自身が目標とする事がある為なんですが……」

「それは私の下では叶えられない事なのかしら？」

「う～ん……孟徳さんの下で、と言うよりも誰の下でも無理なんじゃあないですかねえ、私の目標を理解して頂くと言う望みを叶えるのは……」

転生してから２０年弱、ずっと考えて来た事を思い返してみても、自分の考えがこの時代には非常にそぐわない考えであり、この考えに賛同してくれる様な人達も見当たらないまま今に至っている訳なのですから、もしも、この考えを実行に移すならば、これはもう自分一人で遣って行かなければならないのであろうと思っているだけなんですがね。

「私はね、帝を頂点としたこの国の在り方を変えたいのですよ」

「仲達、貴方正気かしら？」

「ええ、充分正気ですよ。私は現在の様な民に何の徳も益も齎さない帝を頂点とした制度など全く必要無いと思っています。そしてその帝に対して盲目的な忠誠を誓う事が臣下の礼と考えている者達や、己の既得権を最優先させるが為に帝の力を利用している宮中の者達も必要ありません。国とはその様な愚か者達の為にあるのではなく、その国の民達の為に存在するものでなければならないと私は考えます。私にとっては国の民一人一人が希望を持って暮らして行ける世の中を造る事が、馬鹿馬鹿しい覇権争いをするよりか余程重要な事なんですよ」

孟徳さんは目を見開いたまま、私の方を見て固まっています。

「具体的に言えば、国政は有力諸侯の中から入れ札で国を纏める者を選び、便宜上それを首相とでも呼びましょうか……その首相と各州の代表とでの合議制で運営して行くのが理想と考えます。一方で帝は政治には全く関わらずに、国家鎮護の為の祭祀を取り仕切り民の為の祈りを捧げていただきます。この考えの肝心な所は首相の任命権や合議制の閣議決定で出来た法令などの批准権は帝にあると言

う事で、これを持って帝は『君臨すれども統治せず』の状態になり政治の実権は有力諸侯による合議制に委ねられます。勿論この様な案が最終決定では無く、あくまでも私の思案ではありますが、概ねこれが私の目指して行きたい目標です」

私の考えは転生前の私が生きていた日本での天皇制と議会制に倣っています。最も日本でも紆余曲折を経て現行の状態となっていった訳ですが……

「如何ですか……？　この様な危険極まりない思想を持ち、飼いならす事が難しい厄介な者と知ってまで貴女は私を幕下に欲しがりますか？　貴女にとって獅子身中の虫になる可能性が高い者を身近に置けますか？」

「そ、それは……」

「先程迄と違って言い淀んだと言う事は、私を仕官させる事を躊躇した……と、言う事と考えて宜しいですね。妥当な判断です。では、私はこれにて失礼いたします」

私は不本意ではありますが、孟徳さんが見せた一瞬の隙を突いて、畳み掛ける様に言葉を紡いで席を立ち閲覧室を退出しようとしました。

「お待ちなさいっ！！」

しかし、情けない事に孟徳さんの一喝で、私の足は持ち主の意志に全く関係なく一歩も動けなくなってしまいました……日本の戦国の世に武道の達人が使ったっていう不動金縛りの術って、術に掛かるとこんな感じなんですかねえ……いやいやそんな悠長な事考えてい

る場合じゃあありませんね。

「仲達、今言った事は、貴方の本心なのかしら？　貴方程の者が、到底実現不可能な妄想に近い考えを持つ筈がないわ。確かに今言った事も貴方の考えた案の一つでしょうけれど、貴方の真の目標はもっと別にあるのではなくて？」

ちいっ、流石は覇王曹孟徳ですね。一瞬にして私の考えを見抜きましたか……しかし、この方一体何処までチートなんでしょうねえ……一度この方の正式なパラメーターを拝見したいものですね。まあ、馬鹿な事考える前に、さて一体どうやってこの難局を切り抜けましょうかねえ……

「流石は孟徳さんですねえ……私如きの苦し紛れの策では、貴女の事を謀る事は出来ませんか……」

そう言いながら、私は孟徳さんの側に立ちます。身長が現代で言う所の１８０ｃｍ弱の私が、腰掛けている孟徳さんを見下ろす様な形になっている事が心苦しいのですが、背に腹は代えられませんので此処は一つ不躾を許して貰って、失礼な事を承知の上で孟徳さんの顔を見つめます。

「私の事を謀ろうなんて、百年早いわよ」

あのお、孟徳さん、その言い回しは、この後漢の時代ではどうなんでしょうって感じなんですけれど……まあそんな事はどうでも良い事ですね。

「どうしたのかしら急に黙り込んで？」

あっ、また孟徳さんの目が捕食者の目になりましたね……う～ん、この様な手段はあまり使いたくなかったのですが……

「いやあ、参りました……しかし、こうやって孟徳さんと話をしていると、如何に貴女が魅力的なお嬢さんであるかと言う事を再度認識させられますねえ……」

「なっ、いきなり何を言っているのかしら、貴方はっ！」

おやおや、いきなり顔を真っ赤にしてワタワタとするなんて、なんて新鮮な孟徳さんなんでしょう……

「いえいえ、この司馬懿仲達。感じた事をそのまま申しただけで他意は御座いませんよ」

「あ、貴方、熱でもあるんじゃないのかしら？　急に何の脈絡も無い様な事を言い出すなんて」

ん～どちらかと言えば熱があるのは、首筋辺りまで真っ赤に染まった貴方の方ではないかと私は思うのですがねえ……

「これは曹孟徳ともあろう御方が異な事を仰る。魅力的なものを魅力的、綺麗なものを綺麗、素晴らしいものを素晴らしいと素直に口にした私の言を疑われるとは……それに素晴らしいとかの賛辞は孟徳さんならば聞き慣れているでしょうに」

「聞き慣れているとかいないとかの問題ではなくて、何故、貴方みたいな朴念仁がいきなりそんな事を言い出すのかと言う事よっ！！」

あれっ？　孟徳さんの中での私の評価って朴念仁なんですか？　そ

もそも朴念仁って和製漢語ですよ。何でそんな単語貴女が知っているんですか？　いやいやそんな事よりも私ってそんなに……え～……貴女一体私の事をどう見ていたのでしょうか？

「朴念仁には朴念仁なりの鬱屈した愛情表現と言うものがあるのですよ、孟徳さん。それに貴女は、女性としての魅力は勿論の事、成熟した人としての魅力をも持ち合わせていますよ。たまには元譲殿や妙才殿だけでは無く私の事も閨にお誘いくだされば……」

「なっ、なっ、何を……閨になんて……」

私の思いもかけぬ言動によって、旨い具合に孟徳さんの覇気が散り、またもや隙が出来ました。逃げるならば今ですね。

「と、言う訳で、とっても魅力的な孟徳さんには申し訳ないのですが……私の様な朴念仁では孟徳さんの無聊をなぐさめる事は出来かねますので、これで失礼しま～す」

三十六計逃げるにしかず、私は脱兎のごとく閲覧室を逃げ出しました。こう見えても私、武は全く駄目ですが逃げ脚だけは『司馬の八達』の中で一番速いんですよ。

「待ちなさいっ！！　司馬懿仲達！！　私は絶対に貴方を仕官させる事を諦めないわよっ！！」

遥か遠くの方で、何か恐ろしい孟徳さんの怒声が聞こえて来た様な気がしましたが

「ああ、聞こえない、聞こえない。私には何も聞こえない」

私はそう言いながら宮中の長い廊下を、両耳を塞ぎ、頭を振りながら逃げて行くのでした。

司馬懿　ＶＳ　曹孟徳　　後半戦（後書き）

どうも長い間お待たせしました『司馬懿仲達の憂鬱』　ＶＳ曹孟徳後半戦を書かせて頂きました。

先週の土曜日曜と二日間私用で京都に行っていたのですが、土曜に京都駅に着いて、あまりの警備の物々しさに「やっぱ都会って凄え！！」等と馬鹿な事を思っていたら、その日は、あの一躍時の人となっていたブータン国王夫妻と皇太子殿下が京都にいらっしゃる予定だったとの事でした（苦笑）
そりゃあ、国賓と皇族が御出でになるならあのぐらいにもなるわさ（笑）

まあそんなこんなで京都の友人の所に一泊二日で滞在した訳ですが結局観光は一切せずに立ち寄った場所は「とらの○な」と、「○ロンブックス」と、「ゲマ○」と言う見事なまでのヨタライフ！！

だってオイラの住んでる所には全部無いんだもんっ！！まあこの二日間で充分エロ成分も補充出来た事だし今後も頑張って行きたいと思いますので皆様宜しくお願い致します。

尚、次回更新は１１／３０（水）の予定です。

それでは次回の講釈で……堕落論でした。

一難去ってまた一難　（前書き）

予定では３０日更新だったのですが来週は少し忙しくなりそうなので多少早めに投稿させて頂きました。

それでは『司馬懿仲達の憂鬱』少しでも楽しんで頂ければ幸いです。

一難去ってまた一難

――――　宮中廊下にて　――――

「はあぁ～っ、はあぁ～っ……ぜぇ～っ、ぜぇ～っ……」

のっけから誠に失礼いたしました。いやいや別に怪しい者じゃああありませんよ。先程孟徳さんの魔の手から逃れる為に、脱兎のごとく閲覧室を逃げ出した結果でございますよ。

「あ～っ、疲れた……足が……足が、もう動きません……」

私は確かに司馬家では一番足が速く『逃げの仲達』とまで呼ばれてはいるのですが、如何せん体力が……体力が無さ過ぎますね。

「そう言えば、確か、袁隗様に呼ばれていたんでしたね……あ～、全く孟徳さんのおかげで、使わなくても良い体力まで使ってしまいましたよ」

私が足を投げ出し、だらしなく宮中の柱に凭れ掛って座っておりますと

「お～い！　斗詩ぃ～っ！　来てみろよぉ～っ、こんな所で野垂れ死んでる奴がいんぜぇ～っ！」

「……もぅ、文ちゃんったらぁ……宮中なんだから、そんなに大き

な声出さないでよぉ……それに生き倒れの人なんかがいる訳ないじゃ……って、仲達さん？」

ああ、袁家の二枚看板の御二人でしたか……しかし、野垂れ死にとは酷い言われ様ですねえ……先程の孟徳さんに言われた朴念仁ってのも酷かったですけれど、今度は死人にまでされてしまいましたか……

「ああ、お久しぶりです顔良さんに文醜さん……この様な無様な格好で失礼致します」

「どっ、どうしたんですか？　こんな所で生き倒れなんて……」

いやいや顔良さん？　決して私は生き倒れなどでは無いですからね……何気に貴女も文醜さんと一緒で酷い事言いますね……

「いや、ちょっと激しい運動をしましたものでね……その、何と言うか……極度の疲労で動けないのですよ」

「はぁ～っ？　仲達の旦那が運動？　一体今度は何をやらかして逃げてんだよ？」

「ちょ、ちょっと文ちゃん失礼だよぉ……仲達さんに」

「何をやらかして……と、言う所にツッコミたい所ではありますが、まあ良いでしょう。実は先程、孟徳さんに仕官の話で捕まりそうになったので、私の特技『三十六計逃げるに如かず』を使って脱出してきた所なんですよ」

「「ああっ……」」

私の話を聞いて、御二人は声を揃えて頷かれていましたが、何故か二人の目からは共通して『御愁傷様です』的な色合いが多々含まれていたのは私の思いこみ過ぎですよね……多分

「それはそうと顔良さんと文醜さんが御二人だけで宮中にいるなんて……如何されたのですか？」

「いえ、二人だけでは無くて麗羽様も御一緒なのですが、只今麗羽様は袁逢様の所にいらしゃるので、こうして文ちゃんと一緒に時間を潰しているんですよ」

「あたいはこんな所で時間を潰すぐらいだったら、何処か誰にも見付からない場所で斗詩と二人で気持ち良い事したいんだけどなあ……」

「ちょっと……文ちゃん、いきなり何を言い出すのよぅ……仲達さんだっているのにぃ……」

ああ、そう言えば原作でも二人はこんな感じだったですねえ……私とした事が失念していましたよ。

「ああ、文醜さん……貴女にとって非常に有意義な情報を一つ御教えしましょう。ちょっと耳をお貸し下さい」

「ん？　有意義な情報ってなんだぁ？　仲達の旦那」

そう言いながら側に来た文醜さんに私は顔良さんには絶対に聞こえない様な小声で話します。

「この廊下の先の庭園に宮中の侍女達が休憩時に使う亭があるのですよ。其処なら今の時間は誰も近付きませんし、多少宮城の母屋からは離れてますので、余程大きな声を出したりしない限りは何をしても分からない筈ですよ……」

「それ本当かよ旦那っ！！　斗詩っ！　斗詩っ！　あっち行こうぜっ！」

私の言った事を聞いた文醜さんの目が爛々と輝いて顔良さんの腕を掴んで強引に亭に向かって走り出します。

「ちょっ、ちょっと文ちゃん……っ、一体どうしたのよぉ。痛いっ、痛いってば……仲達さん！　一体文ちゃんに何を話したんですかぁ？」

「いやいや、何時も仲睦まじい貴女方の為に、ちょっとした贈り物ですよ。文醜さんも顔良さんも頑張って下さいねえ」

「恩にきるぜぇっ！　仲達の旦那っ！」

「うわぁ～ん、何か御嫁に行けなくなっちゃう様な気がするのはどうしてえぇ！」

「大丈夫だよっ！　斗詩の事なら、あたいがちゃんと責任とって嫁にもらってやるからさ」

「それ全然大丈夫じゃないよぉ……文ちゃん」

二人の掛け合い漫才が廊下の向こうに消えて行きます、御二人の未来に幸あらん事を……さてと私も何とか動けそうなぐらいまでは回

復した様です。それではそろそろ私も袁隗様の所へ向かうとしましょうか。しかし、本初さんも袁逢様に呼ばれている様でしたね……私が袁隗様の所に呼ばれている事と何か関係があるのでしょうか？

――――　宮中内　司徒　袁隗の執務室　――――

「恐れ入ります。遅くなりましたが司馬懿仲達、只今参上いたしました」

「ああ、仲達。来てくれたのですね。遠慮は要らないから御入りなさい」

「はい、それでは失礼致します」

ここは宮中内に用意された、司徒である袁隗様専用の執務室です。私は袁隗様の秘書の様な仕事をしてはいますが、あくまでも私的な秘書である為に普段は袁隗様の公邸の方で住み込みで仕事をやっております。ですから此方の宮中での執務室など滅多な事では呼び付けられたりはしません。まあ仮に私が袁隗様に用事があっても官位や役職も持たない若造など宮中に入れてくれる筈がありませんが……

「急に呼び出してごめんなさいね……でもどうしても貴方に聞いて欲しい事だから……」

袁隗様はその端正な顔を多少歪められて、部下である私に対しても謝罪の言葉を述べてくれます。しかし、袁隗様、いつも御綺麗ですねえ……年齢は確か３０代前半ぐらいだったと記憶してはおりますが、どう見ても２０代前半にしか見えないですよね。これで三人の子持ちだと言うのですから更に驚いてしまいますよ。

「何を仰いますか、私は袁隗様の私設秘書筆頭の立場でございますので、何時如何なる時でも求めに応じて主の下へ駆け付ける事に否やは御座いません」

そう言うと私は袁隗様に揖礼して頭を垂れます。

「私の前でそんなに堅苦しく構える事は無いわ。公邸でいる時の様に眠たそうな目のちょっとだらしが無い、何時もの仲達で良いのよ」

袁隗様は柔和な笑みを浮かべて私に御茶を勧めます。しかし此処でも私は、眠たそうな目でちょっとだらしが無いって……少し身嗜みや日常の態度を正さなければなりませんねえ……

「先程、資料室で孟徳さんとお会いした折にも、彼女からも眠たそうな目と言われたのですが……」

「あら？　貴方、孟徳と会ったの？　丁度良かったわ、あの娘には色々貴方の事をお願いしているのよ」

「袁隗様……御気持ちは大変ありがたく思うのですが、私は今のままで充分に満足しています。それとも私が御側にいるのは御迷惑で

しょうか？」

「何を言っているの……この権謀渦巻く宮中で政務をして行く中で、仲達がいてくれるだけで、どれだけ助かっているか……でも仲達、今の私の力では貴方の献策を実現する事も、貴方の能力を充分に活かす事も出来ないのよ……」

袁隗様は心底辛そうな顔でそう言われました。が、袁隗様には申し訳ありませんが私は今の所は全く仕官しようとか、出世しようとかの望みは無いんですよ。その理由の一つには未だ『天の御遣い　北郷一刀』が一体どの陣営に降るのかがハッキリしていない事がありますのでね……

「だから仲達、貴方の様に才有る者は、その才を充分に活かせる場所で思う存分働いて欲しいの……それが貴方の為であり、延いてはこの国の為であると、私は思うのよ」

「私の事を買い被り過ぎですよ、袁隗様。それに御自分の事を過小評価しすぎです……今の宮中で宦官達の権利を削る様な献策は、例えそれを帝が献策されたとしても、色々な理由を付けて有耶無耶にされてしまうでしょう。決して袁隗様の御力が無い訳ではありませんよ」

事実、司空の袁逢様と、袁隗様、袁逢様の御二人に比べれば御若いですが尚書郎の王允様、この御二方も宦官達の横槍や圧力にも決して屈せずに、この漢と言う国と其処に住まう民達の為に身命を懸けて日々の仕事に取り組んでおられますが、この御二方ですら内朝の宦官達に献策を悉く握り潰されておられているのが現状ですからねえ。

「それに袁隗様の様な実績のある方ですら苦心していると言うのに、私みたいな若造が何を言った所で黙殺される事が分かりきっていますし、延いては上げ足を取られて処刑される危険性も多々あります。ならば袁隗様の下で更に研鑽を積み時節の到来を待つ方が、私にとっては急いで名を売る為に仕官したりするよりは、余程有意義な事なのですが……如何でしょうか？」

「はぁ～っ……しかし、仲達。貴方は本当に考えが老成していますね……一見、面倒臭がりの様に見えて、実は物事を綿密に考え答えを導き出している……まるで、我々よりも遥かに長く生きている様に思えますよ」

まあそうでしょうねえ……私は、見た目は若者そのものですが、本当は転生前からの事を考えると実年齢６０ン才ですからねえ……もう老人ですよ老人！！　本来なら何年も前に還暦迎えているんですから血気盛んに……ってな訳にはいかないんですよ。

「いやあ、ただ単に臆病なだけで、思慮分別があっての考えでは無いですよ……」

「貴方こそ、またそうやって自分の事を卑下するじゃないの……フフフ」

袁隗様は含み笑いをしながら、私の顔を見つめます。我が主とは言え、間違い無く美人の部類に入る人妻に見つめられると、ちょっと照れてしまいますねえ……勿論、袁隗様にはそんな気は毛頭ない事は充分承知の上ですがね……ああ、自分で言って何だか哀しくなってきましたねえ……

「仲達が、これからも私の下で居てくれるのは嬉しい反面、貴方の

今後の事を考えると複雑な気持ちだわ」

「まあ、あまり御気になさらぬ様にして下さい。私が好きでやっている事ですから……」

「それに姉上の事もあるし……」

「はいっ？　袁逢様が如何なされたのですか？」

「ええ、今日貴方を態々此処に呼んだ理由が、その事なのだけれど……」

「はあっ……？」

何時もの袁隗様らしくない御姿ですねえ……どうも私を呼んだ理由を言うか、言うまいか非常に迷っておられる様にも見受けられるのですけれど……しかし、どうしたのでしょうか？　何故か先程から私の脳内で危険を知らせるベルが鳴り続けているのですが……

「ねえ、仲達……」

「はい、何でしょうか？」

「唐突だけれど貴方……本初の婿になって袁家を継ぐ気はないかしら？」

「は……？　はいぃ～～～～～～～～～っ！？」

袁隗様から聞かされた、私の想像の斜め上を遥か遠くに高速でぶっ飛んで行く様な言葉は、一瞬で私に動作不良を起こさせるほど衝撃

的な言葉でした。

一難去ってまた一難　（後書き）

え～取り敢えず、第七話投稿させて頂きました……

前書きにも書かせて頂きましたが来週の頭はちょっとウチのバイト達が期末試験等で御休みだそうで、何故か私に負担が……まあ、店長って言う役職って結構理不尽なものですからねえ（泣）

取り敢えず次回の投稿予定ですが１２月３日（土）を予定しております。

それでは次回の講釈で……堕落論でした。

婿入りなんてしないからねっ！！（前書き）

どうも堕落論です。『司馬懿仲達の憂鬱』第八話お送りさせていただきます。

今回は袁家筆頭の方の話ではございますが、麗羽様出て来るのは後半少しのみの登場です。麗羽ファンの皆様申し訳ありません。

まあ何はともあれお楽しみ頂ければ幸いです。

婿入りなんてしないからねっ！！

『司馬懿仲達の憂鬱』第八話を始める前に、これだけは言っておくッ！　おれは今　超弩級のショックって奴を、ほんのちょっぴりだが体験した……い……いや……体験したというよりは、まったくおれの理解の範疇をブッチギリで超えていたのだが……

あ……ありのまま　今　起こった事を話すぜっ！

「本初の婿になって袁家を継ぐ気はないかしら？」

な……何を言っているのか、わからねーと思うが、おれも、袁隗様から何を言われたかってのが、よくわからなかったんだ……正直言って頭がどうにかなりそうだった…　エイプリルフールだとかドッキリだとか……そんなチャチなもんじゃあ　断じてねえっ！

もっともっと恐ろしい『袁家の企み』ってものの片鱗を味わったぜ……

……っ！　これは失礼いたしました。あまりのショックで何処ぞのボル〇レフさんの様になるほど、私はパニックを起こしているみたいですねえ。

ハイ、落ち着く為に深呼吸しましょうね……「ヒッツ、ヒッツ、フー、ヒッツ、ヒッツ、フー」……？　ああ、まだ駄目ですねえ

……非常に動揺してますねえ……深呼吸のつもりが前世で妻の初産の時に嫌々ながら憶えさせられたラマーズ法呼吸になってますね……

「……達、……たのですか？　……達、……なさい」

私の目の前で袁隗様が何やら私に向かって心配そうな顔をなされて、私に向かって呼びかけています。私は恐らく目は開いているのでしょうが、脳機能の方が完全停止状態になっているようで全く袁隗様の言葉が耳に入って来ません。

「仲達っ！　仲達っ！　ああ、どうしたのかしら……いつもは冷静沈着な仲達が、こんなに惚けてしまうなんて……もしかして仲達。貴方も本初……いや袁家との結び付きを強固にする事を望んでいたのかしら……だから嬉しさでこの様になってしまっているのね」

ああ、袁隗様……一体何を言いやがってるのですか、貴女は。そろそろ正気に戻っておかないと、どんどん話がヤバイ方向へと進んで行きかねない様ですね。

「いやいや御言葉ですが袁隗様……天地神明に誓ってそれはありませんっ！！」

「あらやだ……もう素に戻っちゃったのかしら……やっぱり、イジリ甲斐の無い子だわねえ、貴方って」

イジリ甲斐の無い子って……袁隗様、私は貴女の事を、かなり天然だと思っていたのですが、実は天然に見せかけた腹黒だったんですね……流石、汝南袁氏の中では一番有能であったと後に言われる方ですねえ……まあ、そんな事はどうでも良いとして……

「まあ、イジリ甲斐があるかどうかは別にして……キチンとした説明をして下さるんでしょうね」

「あら？　何の事に対しての説明がいるのかしら？」

何を開き直って、いけしゃあしゃあと言ってますかねえ、この方は……私は、ほぼ表情を無くした能面の様な顔で袁隗様を見ます。

「勿論、先程、袁隗様が私に言った世迷言に対しての詳しい説明ですよ」

「詳しい説明が欲しいほど、その話に興味があるのね。もう仲達ったら……嬉しいのだったら、ちゃんと言葉でそう伝えてくれないと、お姉さん分かんないなあ」

「嬉しいか嬉しくないかと言うのは私の顔を見れば、ある程度の御理解がいただけるかと思うのですが……あと、誰がお姉さんですか、誰が？」

「え～っ……仲達ちゃん、ノリが悪い～っ！！」

袁隗様……貴女、第七話の後半とキャラが完全に違っちゃってますよ……袁隗様、それで良いんですか？

「全く……ノリで私の一生の大事な相方を決められて堪りますか……それと仲達ちゃんは止めて下さい。流石に袁隗様でも、言葉遣いに多少の無理が見えますので……」

「うっ……そうかしら……でも、でもね、仲達。貴方が姉上の所の本初と一緒になってくれれば、我々袁家縁の者にとっても貴方にと

っても非常に有意義な事だとは思わないかしら？　貴方が本初に婿入りする事によって我々袁家は司馬懿仲達と言う『王差の才』にも等しい人物を袁家の手中に出来るし、一方の貴方は袁家筆頭の姉上の後ろ盾を得られるし、勿論この私も貴方の為ならば協力を惜しまないわよ。どう？　お互いに取って良い話よね。ええ、絶対に良い話だわ！　間違い無く良い話だわ！」

あぁ……駄目ですね、この人。完全に『袁家モード』に突入しましたねえ……えっ？　『袁家モード』って何かって？　それはですね……本初さんを始めとして袁隗様や、袁逢様等、袁家の方々は一度御自分の意見が正しいと思われたら、周りの事など考えなく突っ走ってしまい、その度に配下の者や取り巻きが悲惨な目に逢うんですよ。そうですね……ゲーム内の本初さんの御姿を思い浮かべて貰えれば、今の状況は良く御理解いただけるかとは思うのですが……

「それにね、仲達。今なら本初以外にもね、家の娘の満来、懿達、仁達の三人も漏れなくつけて上げるわよ、あの娘達も仲達の事は満更でもないようだし……本妻は本初で決まりでしょうから第二夫人以降は家の娘達三人と言う事で……そうねえ、新居は洛陽城の南側に元皇族の方が住まわれていた大きな屋敷が空き家になっていた筈だし……そこで仲達には少なくとも夫人一人について三人ほど子を成して貰って……」

「ちょっ、ちょっと待って下さい、袁隗様？　今、御自分が何を仰ってるか貴女自身、御理解されていますか？　そして何故、袁隗様が私の未来予想図を勝手にどんどん創り上げて行っているのですかっ！？」

「あら？　本初や私の娘達だけでは不満なのかしら……？　ならば揚州の公路と張勲も一緒につけようかしら？　それでも不満なのか

しら……もっ、もしかして仲達！　駄、駄目よ、仲達……確かに私は未亡人であるけれど……娘達と共に私まで仲達の下へ嫁ぐなんて……でも、それもありかしら……私も主人が死んでからはそれなりの期間、操を立てている事だし……」

ああ……『袁家モード』が暴走状態に入ってしまいましたね……話がどんどん飛躍して行ってますね……これはちょっとやそっとでは沈静化しませんねえ……仕方ありません……こうなれば最後の手段です。私は懐に隠し持った最終兵器を握る手に力を込めました。

「袁隗様っ！！　お願いですから、いい加減少しは私の話を御聞き下さいっ！！」

スッパ～ン！　と、小気味良いハリセンの音が執務室に響きます。何故ハリセンが登場してくるのかと言いますと、極稀に起こる『袁家モード』状態の袁隗様の暴走を止める為にそれ用のハリセンを懐に常備しているのですよ。フッフッフ……備えあれば憂いなしと言うでしょう。まあ、致し方無い事とは言え、主である袁隗様をハリセンで叩くと言う事に若干心は痛みますがね。

「痛ぁ～いっ……何？　何が起こったのかしら？　あら？　仲達……その右手に持っている物は……もしかして……私、またヤッテしまったのかしら……」

「どうやら正気に戻られた様ですねえ……ええ、それもかなりな暴走状態でしたので、畏れながらこれを使用させて頂きました」

私は右手に持っていたハリセンを態とらしく両手に持ち変えて、袁隗様に恭しく差し出す様にします。

「うぅっ……それにしたって……そのハリセンは、ちょっと酷いんじゃあなぁい……」

袁隗様は涙目で私を見て拗ねる様な素振りを見せますが

「何を仰ってるのですか……本初さんとの話だけに留まらず、お嬢さん達の事や……果ては御自分の欲望を半ば剥き出しにしてたじゃあないですか。私が止めていなかったら、全くどうなっていた事か……」

「そうそう、その本初との話だけれどねえ……」

そう言って袁隗様は何事も無かったかのように話を戻します……全く形勢が不利になると、直ぐに知らぬ顔を決め込むのですから……

「今度はキチンと説明して頂けるんですよね。　袁隗様っ！！」

「もう、そんな怖い顔しなくても良いじゃないのぉ……男前が台無しよ……仲達」

「先程は確か、眠たそうな目のちょっとだらしが無いとか仰られていた様な気がするのですが……」

「もう……なんてイケズな子なのかしら、そんなんじゃ婿の貰い手がなくなるわよ」

「そんな事は大きなお世話です……ってか、なんで私は婿入りが前提なんですかっ！！」

と、まあこの様に全く話が進まずに、袁隗様と二人で、ギャーギャ

ーと袁家の二枚看板よろしく掛け合い漫才をしていた時

「次陽、私だ……忙しい所を悪いが急用でね、ちょっと失礼するわよ」

ああ、この声は……間違い無く袁逢様ですね……殆ど説明がありませんでしたが袁隗様が仰られていた婿入りの話し、顔良さんが言っていたのは本初さんは袁逢様の所に居るという事、そして今、袁逢様が何ともタイミング良く、袁隗様の執務室を訪れられた事、以上の事を鑑みるに……あれ？　私の逃げ道って、どんどん閉ざされてませんか？

――――宮城内に多数有る庭園の亭――――

袁逢様が執務室に来られて急用とやらを袁隗様と話し合われた後、我々は宮城内に多数ある庭園の亭の一つで御茶の時間を過ごしております。

まあ、急用である様なので席を外しますと私が言っても、袁隗様、袁逢様両名から、この場に居る様に強く仰せつけられたり、仕事向きの話であるのに何故か本初さんも同行していたり、急用と言うのが大した話じゃあ無かったり、話が終わった後に何故か急に御茶でもしようと言う事になったりとツッコミたい部分は山ほどあるのですが……

「……と、言う訳なの。ああ、それと以前に次陽から申請のあった洛陽の区画整理の件ですが、ほぼ次陽の原案通りに私の部署で

実行する事になったわ。あれは良く出来た案ね、帝も至極感心しておられましたよ」

「ありがとうございます、姉上。しかし、あの区画整理の案の企画立案は、此処に控えております仲達が全て一人で行ったものですわ。お褒めの言葉なら私では無く、仲達にかけてやって下さい」

「ほう、以前から出来る者だとは思っていましたが、帝が興味をもたれる様な案を出せる程の知恵者であったのね……しかし、あの様な案件を、たった一人で考えられるなど、いや全く恐れ入ったわ。この様な優秀な者を持っているとは……次陽、貴女が羨ましいわ」

「何を仰いますの、姉上。仲達の才は私だけのものではございませんわ。彼の者の才は袁家の……延いては国家の才であると私は常々考えておりますわ」

何でしょうか……この首筋がうすら寒くなるような会話は……区画整理の件は私個人の案であると袁逢様も元々御存知の筈だったじゃあないですか……それに御二人の会話は、仲人が見合い相手の略歴を非常に誇張して話している様にしか聞こえないのですけど……まあ救いは余程話がつまらないのか、本初さんが心此処にあらずで金髪ロールを弄って遊んでくれている事ぐらいですねえ。

「そう……仲達の才は袁家のものだけでなく国家の才ね……次陽に其処まで言わせるとは中々前途有望な若者じゃあないの……ところで仲達」

「はい、何でございましょうや。袁逢様」

「そんなに畏まらなくても、いつもの貴方のままで良いわ。家の本

初と面識はあるのよねえ……」

「はい、我が母の出仕に伴い洛陽に参りまして、袁隗様の下で働かせて貰う間に袁紹様にも多々御世話になりました」

御世話に……とは言うものの殆ど全部、顔良さんが御世話してくれたんですがね……

「そう……仲達、貴方の様な知恵者の目から見て我が娘は、どの様に見えるかしら？」

「どの様に見えるか……でございますか？」

これは気を付けなければいけませんね……答え方一つで、私が窮地に陥るのが目に見えていますねえ……しかも、どう答えても地雷を踏みそうな気がするだけにタチが悪いですねえ。それに袁隗様も袁逢様も、暗に、余計な事は言うんじゃあ無い的な雰囲気を醸し出していますしねえ……さてどう答えたものでしょうか？

「畏れながら申し上げます。私の様な若輩者が袁家筆頭のお嬢様を評するなど、とても出来ません……しかし、それでは袁逢様の御言葉に背く事にもなりましょうから、一つだけ私見を述べさせていただきますと、袁本初様に於かれましては、流石四世三公を輩出した家柄を継ぐだけの器量をお持ちになった素晴らしいお嬢様であり、更に精進してこのまま長じれば英雄としての資質も充分であると私には見受けられます」

うん……我乍ら良く頑張りました。非常に無難でどうとでも取れる様な素晴らしい回答です。決して人の話を聞かないとか、華麗に雄々しくって意味分かんないとかは言ってませんよ……

「そう……期待していた応えとは多少違うけれども、貴方が娘に悪い感情を持っていない事が分かって良かったわ。今後とも娘の事を頼むわね」

あれ？　何か答え方間違いましたか？　いや、決して本初さんに悪い感情は持ち合わせてはいませんが、今後とも頼むと言う様な答えは予期しなかったんですが……

「流石は仲達ね。あれだけの話で此処まで理解してくれていたなんて……」

袁隗様？　私が何を理解しているというのですか？　貴女、壮絶な勘違いをなされてませんか？

「本初、私は政務に戻りますが、貴女は今暫く此処で仲達に、今後の国の在り方についての教えを受けなさい。仲達、娘には次陽にした話はそれとなく通してあります……だから、そのつもりでお願いしますね」

袁逢様は、そう言うと私と本初さんを交互に見た後に、満足そうな笑顔で亭を出て行かれます。それを見送った袁隗様も、それはそれは素晴らしく優しい笑顔で我々にこう言います。

「仲達、貴方、今からは休みで良いから、御茶を片付け終わったら本初を連れて街にでも行って来なさいな。そして貴方が献策した街の区割を本初に説明しておあげなさい」

ちょっ、ちょっと待って下さい……何ですか？　その、後は若い二人に任せて……みたいな退出の仕方は、これじゃあ、まるで本当に

お見合いの様じゃあないですか。

「では、仲達に本初、私も政務に戻ります……それでは楽しいひと時をお過ごしなさい。頑張るのよ仲達」

袁逢様に続いて、袁隗様迄もいなくなってしまい亭に残るのは私と本初さんのみです……しかし、二人きりというのは気まずいですねえ……でも、流石は本初さんですね、私と二人だけになってしまったというのに悠々と御茶を飲んでいらっしゃいます。袁逢様の話だと、私の婿入りの話もそれとなく伝わっているらしいですが……だとしたら案外この方って大物なのかもしれませんねえ。

「ところで仲達さん……」

御茶を飲み終わったらしく本初さんが初めて口を開きました。孟徳さん程では無いにしても、この方も流石は袁家を背負って立つ人材です。やはりそこはかとなく威厳をお持ちですね。

「はい、何でしょうか？」

「お母様に連れられて此処まで来ましたが……」

「はい……」

一体何を言われるのでしょうか……？　やはり本初さんも望まぬ縁談は御嫌なんでしょうねえ……勿論、私とて御免被りますがね……

「仲達さん……何で、私はこの様な場所で貴方と御茶など飲んでいるのかしら？」

ハハハ……やっぱりこの方は人の話を、それも御自分のお母様の話しでも、まともに聞いていないのですねえ……そう考えた私の身体を、言うに言われぬ脱力感が一気に襲いました。

婿入りなんてしないからねっ！！（後書き）

いやあ、最後の方だけチョコッと麗羽様を喋らせましたが結構難しいですねえ。

やはり、あの高笑いをしてこその麗羽様だと考えさせられました。
次回は麗羽様との洛陽散策を予定いたしております。恐らく引っ張り廻されての珍道中となるであろうとは思いますが宜しければ御付き合い下さいませ。

次回は１２月１０日（土）の投稿予定でございます。

気温が下がり体調を崩し易くなってきています、読者の皆様も御身体には充分気を付けて下さいませ。

それでは次回の講釈で……堕落論でした

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2154y/

司馬懿仲達の憂鬱

2011年12月2日22時27分発行